

報告5 デンマーク

重い知的障害者の大規模居住施設 ”田舎町・スーロン”に驚く

オフィスからバスで南に30分ほどでスカナボー（Skanderborg）自治体に入る。静かな湖の畔、自然豊かな公園のなかに、重い知的障害者住居”田舎町スーロン（Landsbyen Solund）”がある。デンマークで唯一の大規模入所施設だ。10年前に訪問したことがある。

「デンマークでこうした大規模施設は5つあるが、ここが最大の施設だ。最後の恐竜ディノサウルズだ。しかし、けっして消えてしまうことはない」



施設長は、若い女性のロネ・ロッド（Ms Lone Bahnsen Rodt）だ。スーロンの沿革と概要を説明する。（WEB <http://www.solund.dk/>）

・設立は1930年。最大時550人の入所者にスタッフ100人。一部屋8人～10人でトイレ・バスは共同だった。

・現在、利用者は18歳～92歳の重い知的障害者235人。スタッフは700人（生活支援員や管理部門スタッフ+医療専門チームなど）。

・25haの自然公園の中に、14ブロックの共同の建物で暮らしている。温水プール、音楽セラピー、乗馬、スノーズレンセンターがある。

・国の障害者問題の研修会場でもある。長年のケアの蓄積があるので、研究者12名がここに雇用され、研究活動を行っている。

・ここは住居なので、プライバシーがある。何もないとくに放り出されると混乱してしまう人たちが、安心感を持って暮らしていける環境がある。

・でも、ここだけに住んでいると閉鎖的になるので、町の人がここにやって来てもらえるような計画にとりくんでいる。夏至の夜、町で大きな焚き火をするが、ここでやってもらっている。ここで市民の大パ



ーティが行われる。

・利用費用は、年金が年額20万クローネほど、家賃+食事などの必要経費が14万クローネ/年。

*スーロンの運営は2007年の行政改革で、県から自治体に移行した。スーロンは自治体の3%の予算を使う。でも、利用者の出身自治体が必要な経費をこの自治体に支払うので、自治体財政はうるおっている。



「10年前に訪問したときの印象からすごく発展した感じがします。」絶滅するもの”から、なにが変わったんですか？」と聞いた。

「2001年頃は、デンマークはこうした”大規模入所施設は止めよう”の流れでした。でも、利用している知的障害の重い人たちに、それはできないことをわかってもらって、”存続させる”ことになりました。そうしたら、どんどんここは変わっていったのです」。しかし、すごい発展だ。

*

65歳になったという盲ろうの女性が一人部屋で暮らしていた。（左写真）

彼女は、プールも乗馬も楽しむそうだ。

（藪部英夫）